

遺跡：遺跡とは過去の人間の行動を示す痕跡、遺物或いは遺構の残された場所をいう。史跡を調査すると暮らし〔生活〕の場か、埋葬の場であることが多い。

遺物：過去の人間の行動の結果として現在まで残された「もの」をいう。遺物には生活用具としてつくられた人工的遺物と動植物・魚貝類の残滓、鉱物などの自然遺物に分けられる。食器・調理具・身体装飾品・狩猟用具・農耕具・武器は時代の進展によって材質の変化が見られる。古くから作られたのが石器・骨角器・木器で次第に工夫が加えられた。特に土器の器形や付けられた文様・装飾は、時代の新旧を見分ける基準となる。青銅器・鉄器の利用は初期には限られた権力者が占有していたが、やがて普及が進み、社会生活を大きく進歩させた。

高鷲の遺物・石器

〔高鷲村史・高鷲の文化財から引用〕

集落が出来るためには、石器時代の人々にとって飲料水を欠く事ができない。漁猟の便と猛獣等外敵に備えるため、川沿いの特に二つの河川が合流する三角地域を選んでいる。

高鷲村には縄文遺跡から出土した遺物・遺跡である鷲見屋官林遺跡や浄勝寺遺跡・寺屋敷遺跡・敬願寺遺跡等幾つかの遺跡がある。

《遺構》敬願寺遺跡は平成 2 年 5 月より発掘調査され、その結果約 5000 年前より複合した縄文の遺構や出土品が多数発見された。その中に住居址や炉跡など、円形石列を中心とした共同墓地域の一部が明らかとなった。



▲敬願寺遺跡全景



▲石細柄

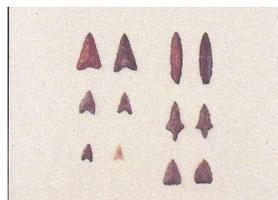


▲住居址

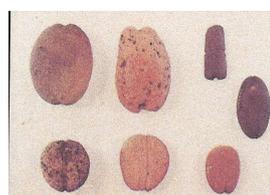
現在高鷲で出土発見された石器の主な物は、石斧、石剣、石皿、凹石、石匙、石包丁、石錐、石鏃、曲玉等があり、前述した 4 つの遺跡から出土している。高鷲の遺跡からの石器は、下呂石の石器が盛んに作られているが、他の石材の物は成品の形でもたらされている。石斧は磨製石器が多く、大きい物は 15cm から数 cm の物で、川原石を磨き、先端を両面から研ぎ、刃を付けた物である。大部分は定角式磨製石斧で、刃部は両刃であって断面が三味線の同形をなす長方形の物が多い。用途はこれに握り或いは柄の先に挟んで、土掘りか木工用に使用したと思われる。石剣は、部落の首長の指揮棒又は、権力を象徴するような器具とされている。石匙は、ナイフ・スプーンのような用途の物である。長さ 4cm、柄の反対側に横に刃部があって、柄を付けて使用した。石錐は、長さ 3.5cm の紡錘状で一端が少し太く、柄を付けて使用した。石包丁は、長さ 8cm 単孔磨製の石器である。石鏃は、狩猟用に矢の根である。出土の数は多く、ほとんど打製で紋岩の物が多く、2 ~ 3cm の物である。



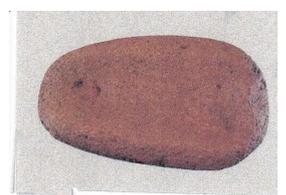
▲石錐・石匙



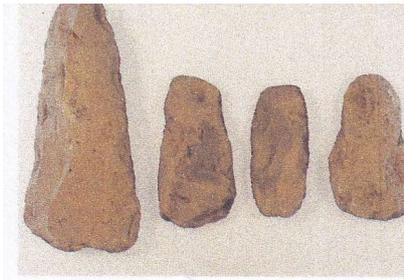
▲石鏃



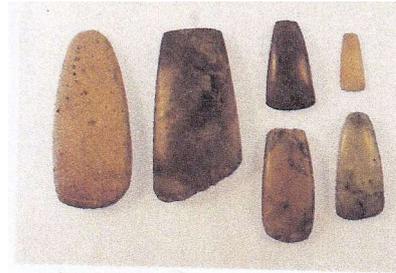
▲石斧



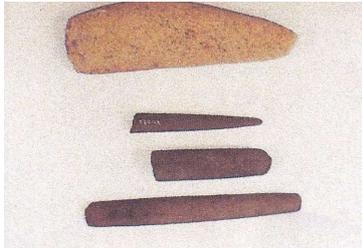
▲石皿



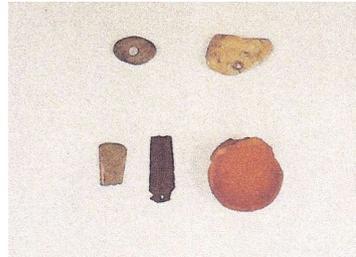
▲打製石斧(



▲磨製石斧(



▲石棒

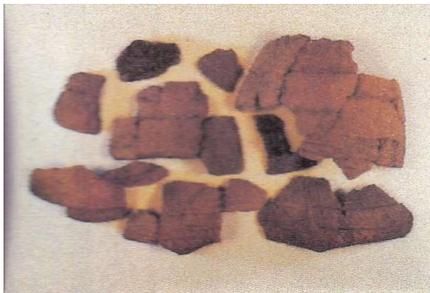


▲玉・耳飾・垂飾((装飾品

高鷲の出土した土器

縄文文化は狩猟・漁労・採取を軸とする生活の上に成り立ち、1万年にも及ぶ縄文時代は土器の様相や生活文化の段階を考慮して、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に分けて考えられている。

高鷲の出土遺物には、草創期・前期の石器はなく、石器の石皿や石匙、石臼、磨製の石斧などがある。その頃にはすでに穀物が食され、開墾や土掘りが行われていたと考えられる。縄文土器がある以上そこには住居跡がともなっている。高鷲でも住居跡及び土器破片が出土している浄勝寺遺跡や敬願寺遺跡などから5000～6000年前には人が住んでおり、人の往来もあっただろうと想像できる。



▲土器



▲壺復元



▲壺復元

これらの土器は左から敬願寺遺跡から出土した土器の破片、真ん中が復元した中期の深鉢形縄文土器、右は後期の深鉢形縄文土器の復元である。

高鷲には向鷲見の浄勝寺遺跡、鮎走の寺屋敷遺跡、鷲見の教願寺遺跡などにはその居住址が必ずあるはず。それを物語るのは、前述のように縄文土器の発見である。また、高鷲付近の山野溪流で鳥獣魚族を狩り、縄文末期には高鷲の向鷲見盆地の川辺・山沿いなどでは相当の集落をなした竪穴式住居を造って集団生活を営んでいたことが想像される。

縄文文化は、その後、紀元前4～3世紀頃に次の弥生文化に交代する一万年におよび、全国的に発達した。縄文土器の多くは粘土の紐を積み上げてゆく方法で形成され、露天の焚き火で600～800度前後の温度で焼成された。したがって色は一般的に黒ずんでおり、固さももろい。早期の土器は深鉢形で底がとがり、中期の土器は円筒形で平底のものが多く上部はかなり精巧な装飾が施されている。後期の土器は甕形・壺形・注口形など変化の多い土器が造られ、文様も精巧で優美なものが多くなる。晩期の土器はさらに複雑な形を持つようになり、文様には無文のものも現れて、縄文土器の最も成熟した姿を示すようになった。